

桜谷鉦と江の川下流域のたたら製鉄

角田 徳幸（雲南市教育委員会文化財課）

はじめに

桜谷鉦は、『石見八重葎』や『金屋子縁記抄』の著者として知られる石田初右衛門春律が経営した鉦である。その所在地については、現存する桜谷鉦金鑄児神社付近にあり、採石場により改変を受けていたため、現存しないものと思われてきた（松田 2003）。ところが、2022 年、島根県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行っていた本田窯跡の下層で近世の製鉄遺跡が確認され、『金屋子縁記抄』所載の絵図との対比から、これが桜谷鉦である可能性が浮上した。

筆者は、かつて「石田初右衛門春律」の名が残る桜谷鉦金鑄児神社や関連史料を通して、江の川下流域の鉄生産を検討したことがある（角田 2008）。その特色は、銑鉄の生産と江の川水運の利用にあるといえるが、本稿ではそれ以降に確認された史料も含めてあらためて整理してみたい。

1. 桜谷鉦の金鑄児神社

桜谷鉦の金鑄児社は、18 世紀中頃から 19 世紀にかけて造営されたもので、金鑄児社、船魂社、山祇社などよりなる。祠は、いずれも凝灰岩（福光石）の切石製であるのが特色である。金鑄児社は 1761（宝暦 11）年 9 月に、山祇社は 2 年後の 1763（宝暦 13）年 4 月に渡利一藏正朗と十平治正常によって造営された。船魂社は年号に判読できない部分があるものの願主が金鑄児社・山祇社と同じで、山祇社と同様に宝暦年間 4 月の文字が見られることから、宝暦 13 年に山祇社とともに造られたと思われる。また、山祇社はその銘文に「奉再建」とあり既に前身となる祠があったと推測され、桜谷鉦の創業はこれ以前に遡ることが考えられる。したがって、金鑄児神社が現存する福光石製の祠として整備されたのが宝暦年間であったと見てよからう。

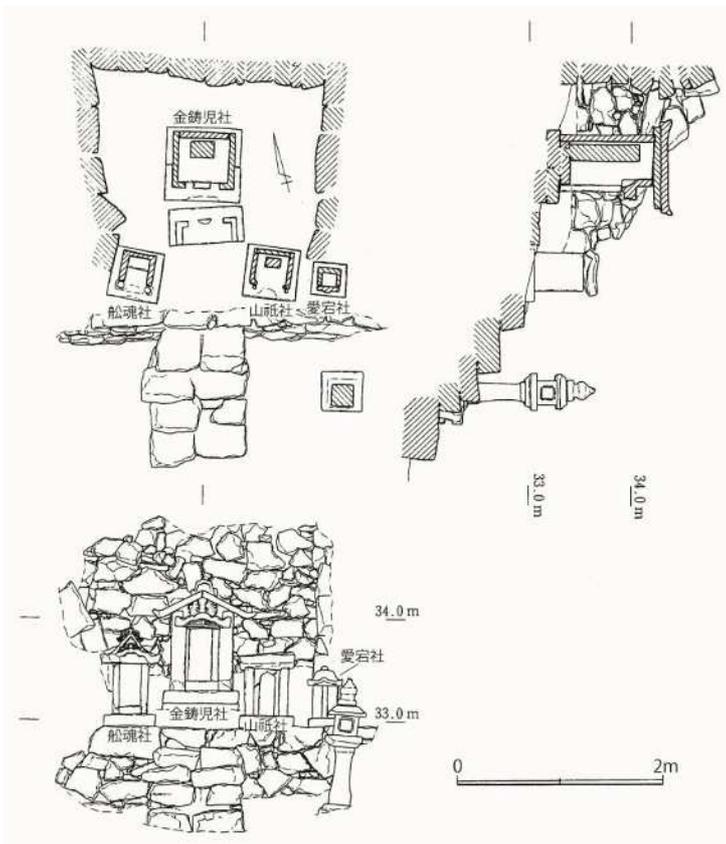


図1 桜谷鉦の金鑄児神社

金鑄児社・山祇社・船魂社を造営または再建した渡利一藏は、邑智郡川本村(現川本町)の人物であることが祠の銘文よりわかる。彼の位牌は、山内にあった阿弥陀堂に阿弥陀如来立像と一緒に安置されていたようだ。位牌には、正面に「釈教順 明和九年壬辰九月廿八日」、右側面に「俗名 渡利一藏正朗」と記されており、渡利一藏は1772(明和9)年に没している。阿弥陀如来立像は、光背の背面に「覚 一石像阿弥陀如来御一體 願主櫻谷鉄山中興人 渡利一藏正朗 同名重平治長忠 明和九辰年 九月吉日 坪内甚七義知作」との銘文があることから、渡利重平治長忠が一藏正朗の菩提を弔うために作らせたもので、阿弥陀堂もこの際に建立されたと考えられる(角田2018)。

1816(文化13)年8月には、石田初右衛門春律と息子の権左衛門春胤により金鑄児社の祠が再建される。船魂社の祠も、その状況から再建されたものと見られ、この時に併せて造られた可能性が考えられる。金鑄児社の前には古い床石が置かれているほか、神社の周囲には破損した祠の石材と見られるものがあり、福光石は風化し易いことから、補修・再建が随時行われたようである。

また、1858(安政5)年3月には灯籠を村下が奉納したことも確認でき、この頃までは金鑄児神社の整備が続けられたことが窺える。

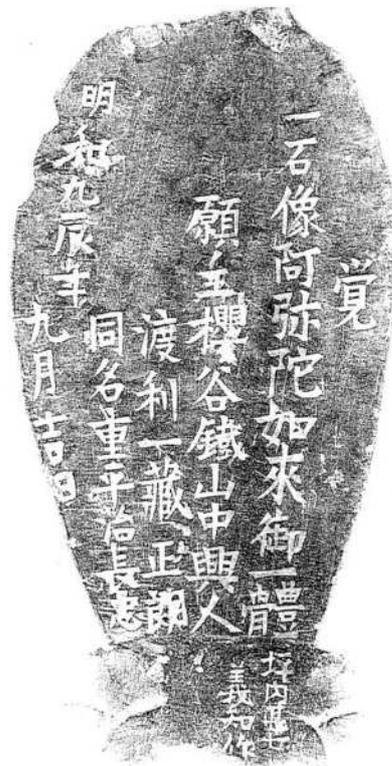


図2 阿弥陀如来立像の銘文

2. 史料からみた桜谷鉦の経営

桜谷鉦が所在する大田村に鉦があったことは、1714(正徳4)年の「銀山御領御立山反別并請方覚帳」(江津市桜江町中村文書)に「那賀郡大田鉦」とみえるのが初見である。1741(元文6)年の「萬貸帳」(大田市宅野泉家文書)にも「大田鉦行恒市右衛門」の記載がみられる(原田2017)。これらが桜谷鉦であるのかは判然としないが、『金屋子縁起抄』の「鑪天秤元祖之事」には、1734(享保19)年に川本村渡利重良兵衛が那賀郡太田村で近隣では初めて天秤吹き「金屋子鑪」を営んだという記事もある。この「金屋子鑪」は桜谷鉦を指すものとみられ、山祇社の銘文からその創業が宝暦年間以前に遡るとみられることと整合性がある(角田2008)

桜谷鉦の最も古い史料は、1760(宝暦10)年に西田屋久左衛門らが桜谷本主一藏あてに出した「相渡し申一札之事」(中村文書)である。ここに見える桜谷本主一藏とは渡利一藏正朗のことで、1762(宝暦12)年に同じく西田屋久左衛門らが作成した「売申山立木壺はゑ之事」には一藏のほか重平次の名も見える。これらは金鑄児社・山祇社・船魂社の造営と相前後する時期のもので、文書に記された経営者名と石造物の銘文が一致する。

渡利十平治の名は、1790(寛政2)年4月の「那賀郡太田村桜谷鑪添村并土蔵木屋諸道具小前帳」

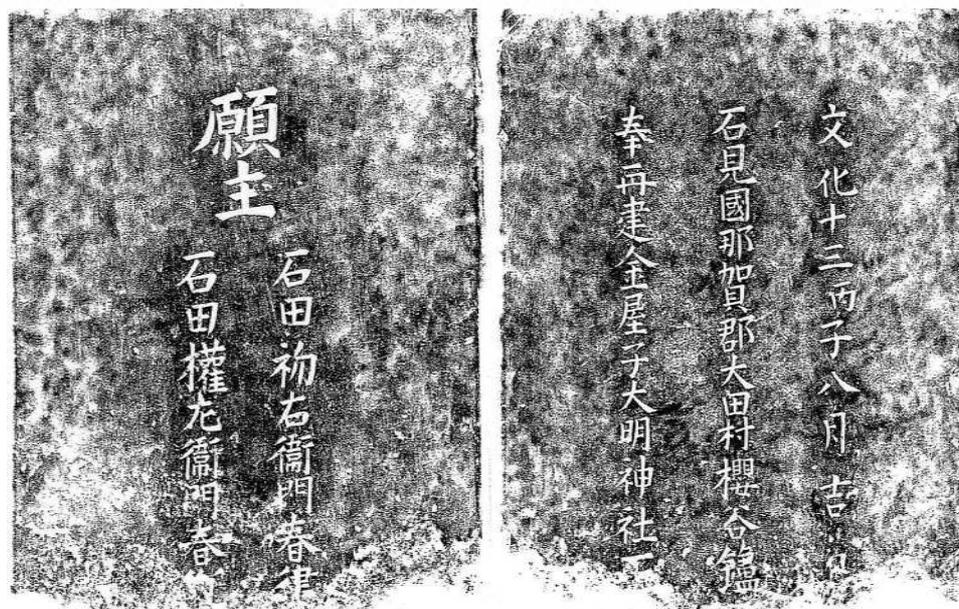
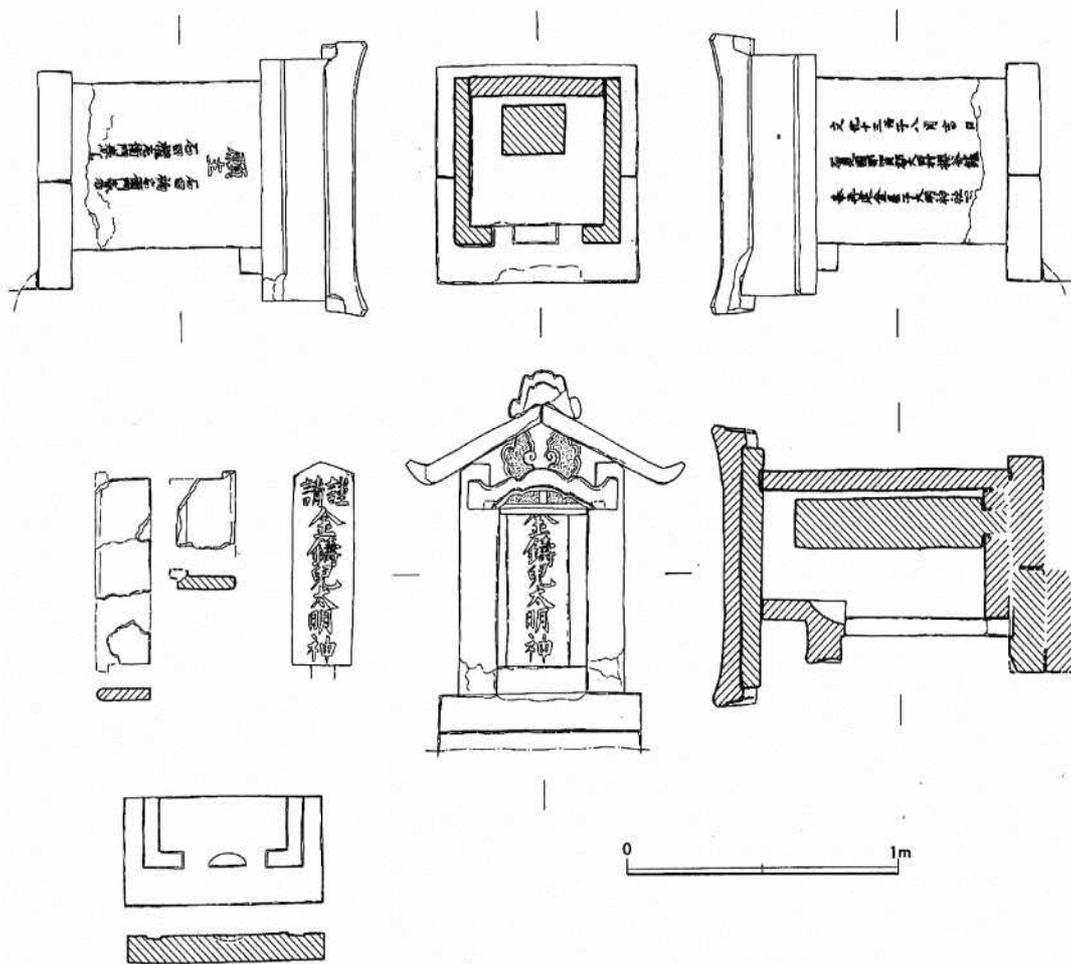


图3 桜谷鉦金鑄児祠と銘文

表1 金鑄児神社銘文と文書からみた桜谷鉦

西暦	年号	表題・記事	出典
1714	正徳4	那賀郡大田鉦	中村家文書
1734	享保19	鑪天秤元祖之事 金屋子鑪 渡利屋重良兵衛	『金屋子縁起抄』
1741	元文6	大田鉦行恒市右衛門	宅野泉屋文書
1760	宝暦10	相渡し申一札之事	中村家文書
1761	宝暦11	金鑄児社 渡利一蔵正朗・十平治正常	銘文
1762	宝暦12	売申山立壺は兎之事	中村家文書
1763	宝暦13	山祇社再建 渡利一蔵正朗・十平治正常	銘文
1763	宝暦13	船魂社 渡利一蔵正朗・十平治正常	銘文
1771	明和8	幸福皆来帳 銃3,374束 浜原西田屋の経営	中村家文書
1790	寛政2	那賀郡太田村桜谷鑪添村并土蔵木屋諸道具小前帳	中村家文書
1790	寛政2	太田村桜谷鉦株川本村十平次殿・波積友右衛門殿江賣渡證文并諸道具下積帳加印扣	中村家文書
1791	寛政3	村下 吉右衛門 炭坂 和三郎	『勸進帳』
1805	文化2	鉦師 重三郎	三上家文書
1807	文化4	村下 富右衛門 炭坂 藤十郎	『勸進帳』
1809	文化6	権左衛門代 利八	三上家文書
1816	文化13	金鑄児社 石田初右衛門春律・権左衛門春胤	銘文
1817	文化14	古へ桜谷鉦の頭、今地蔵岩と申所御出	『石見八重律』
1819	文政2	鉦師 利右衛門	『勸進帳』
1825	文政8	石見国太田村金屋子鑪打附之事	『金屋子縁起抄』
1832	天保3	長田鑪桜谷鑪長良鑪大炭引合帳	中村家文書
1833	天保4	太田波積屋桜谷鉦所諸類入改	中村家文書
1833	天保4	當巳より来る亥迄七ヶ年季相渡し申鑪鐵砂場畑山林質地證文之事	京都大学
1836	天保7	太田村の内字桜谷鑪	沢津家文書
1836	天保7	稼人 岩谷耕助 下稼人 多右衛門	鶴田真秀採録
1837	天保8	銃定高 1,800駄	中原家文書
1858	安政5	村下 辰口	銘文
1862	文久2	小鉄代金 十月二十五日金三両一分ほか	塩田嘉地屋家文書
1880	明治13	生産高 16,350貫	『島根県統計書』
1881	明治14	生産高 17,380貫	『島根県統計書』
1882	明治15	生産高 25,450貫	『島根県統計書』
1883	明治16	生産高 4,530貫	『島根県統計書』
1884	明治17	生産高 18,230貫	『島根県統計書』
1884	明治17	島根県下製鍊場巡回復命書	海軍省
1888	明治21	桜谷銃210束	武村家文書
1892	明治25	桜谷銃450束	武村家文書

と同年 12 月 8 日の「太田村桜谷鉦株川本村十平次殿・波積友右衛門殿江賣渡證文并諸道具下積帳加印扣」（中村家文書）にも見える。これらは渡利十平治が桜谷鉦を波積友右衛門（石田家）に売却した際に作成された文書で、前者が桜谷鉦の添村や施設・道具類を書き出したもの、後者が売却証文である。「添村并土蔵木屋諸道具小前帳」には、吹屋（高殿）・勘場（元小屋）・土蔵・炭木屋2軒・村下屋・炭坂木屋・小鉄木屋・銃蔵・番子木屋2軒・山配屋と計12棟もの諸施設が記される。また、信仰関係の施設については金屋子様御社・愛宕様御社・船玉神御社・山神御社・阿弥陀堂などの記載があり、阿弥陀堂を除けば現在残る桜谷鉦金鑄児神社の構成と一致する。

島根県安来市広瀬町の金屋子神社に伝わる『勸進帳』では、1791(寛政3)年に「櫻谷鑪内 村下吉右衛門 炭坂 和三郎」の名が記される(森山2004)。同様に鉦師・村下などが分かるものは、邑智郡川本町三上家文書のうち1805(文化2)年の「銃鉄下直二付鉦師一統立会申談ルー一件」に「鑪師

表2 明治時代初期の鉄・砂鉄生産状況

村名	銑	鋸	小長割鉄	砂鉄	備考
渡津村	7,760貫				質美、越前又ハ摂津地方へ輸送ス
太田村	15,000貫				銑質美ナリ、阪地へ輸送ス
八神村			2,500貫		其ノ質悪シ、阪地へ輸送ス
下河戸村	12,000貫				銑質美ナリ、阪地へ輸送ス
長良村	29,940貫				銑質美ナリ、明治9年
波積本郷村	17,100貫	460貫			那賀郡黒松村へ輸送ス
平田村	900駄				郷田村へ輸出ス
南川上村	38,950貫				銑質美ナリ、明治9年
郷田村				50,000貫	砂鉄質中等、郷川沿流各地へ輸送ス
金田村				20,000貫	砂鉄質佳、郷川沿流各地へ輸送ス
和木村				9,400貫	砂鉄質中等
嘉久志村				50,000貫	砂鉄質中等、郷川沿流各地へ輸送ス
千田村				11,500貫	其ノ質佳、南川上村ニ輸送ス
神村				9,980貫	砂鉄其質美

重三郎(島根県 1965)、1807(文化4)年の『勸進帳』には「村下 富右衛門 炭坂 藤十郎」、1809(文化6)年の三上家文書「鉄売捌方仕法定書」には「権左衛門代 利八」(川本町歴史研究会 1994)、1819(文政2)年の『勸進帳』には鉦師「利右衛門」がある。また、1836(天保7)年の「鉄鉄出候場所相糺候趣申上候書付」には稼人「岩谷耕助」下稼掛人「多右衛門」がみえるが、下稼掛人「多右衛門」は波根西村(大田市波根町)の脇田屋多右衛門である。多右衛門は、渡津村長田鉦では西田村(大田市温泉津町)殿居種蔵から施設・道具を借り受け操業した稼人である。稼人は鉦の権利をもつ経営者、下稼掛人は稼業を請け負う実質上の経営者とされる。つまり、多右衛門は長田鉦では経営権を得て稼業する一方、桜谷鉦では下稼掛人となり操業を委ねられていたのである。こうした鉦経営のあり方は、那賀郡では珍しくはなく、村外居住者が稼人や下稼掛人となることも多かった(角田・中安 2023)。

原料である砂鉄の購入に関わる記録としては、1862(文久2)年の江津市塩田嘉地屋家文書『小鉄払帖並諸入用簿』に「桜谷鉦より文久二年十月二十五日金三両一分 同三年七月米二俵一五両 八月五俵 一二月丁銀三百一匁」とある(森脇 1966)。1884(明治17)年の海軍省兵器局大河平才蔵による「島根県下製鉄場巡回復命書」によれば、砂鉄の採取地は那賀郡渡津村大濱・郷田村大濱・嘉久志村・神主村・神村の5ヶ所とされ、前3者は浜砂鉄とみられる。木炭は邑智郡川本村・都賀行村・後山村の3ヶ所である。

製品の生産量は1837(天保8)年の邑智郡美郷町中原家文書「鉄山雑用かん定帳」では銑定高1800駄(相良 2005)、『島根県統計書』によれば、1880(明治13)～1884(同17)年では4,530貫～25,450貫とある(島根県 1887)。1876(明治9)年から1885(明治18)年に編纂された『太田村村誌』には物産の項に「銑、質美ナリ、平年壱万五千貫目ヲ製シ阪地へ輸送ス」との記事が見える(江津市 1982)。桜谷鉦の生産高は年によって多寡はあるものの明治13・14・17年は16,350～18,230貫と『太田村村誌』の生産高に近いことから、太田村の銑生産高は桜谷鉦1ヶ所の量を記していると考えられる。また、銑鉄は大阪へ販売されたことが分かるが、石川県金沢市武村家の仕切・受取書には1888(明治21)年に「桜谷銑210束」、1892(明治25)年には「桜谷銑450束」との記載があることも知られ

(長山 2003)、大阪・北陸方面に販路が広がっていたことを確認できる。

前述の「島根県下製鉄場巡回復命書」によれば、操業 1 回には村下 3 人・炭坂 3 人・番子 35 人・炭焚 6 人・鉦修理工 10 人・銑折工 3 人・人夫 79 人が必要であったようだ。砂鉄 4,788 貫 (17.9t) ・木炭 4,830 貫 (18.1t) ・薪 1,250 貫 (4.7t) で、銑 1,020 貫 (3.8t) ・鋸 62 貫 (0.23t) が生産された。

3. 江の川下流域のたたら製鉄

(1) たたら操業・施設にみえる江の川下流域の地域性

江の川下流域における鉄生産が銑鉄を中心としたものであったことは、石見銀山領鉄師惣代より大森代官所に提出された 1836(天保 7)年の「石見銀山領鉄山師惣代答申」などの記録から明らかである。この地域で銑鉄が生産される理由としては、たたらが海岸または川岸に立地し船積みが容易で牛馬では困難な銑鉄の輸送に適していたこと、銀山領の銑鉄は山砂鉄または浜田領日脚産の浜砂鉄を葉小鉄とし、因・伯州より買入れた川・浜砂鉄に組み入れ、鋳物の原材料に向くよう工夫して生産されていたことが挙げられ、「右鑪所(石見・出雲)産の外決而買入仕らず」と鋳物師からも高い評価を得ていたという(森山 2003)。

江の川下流域及び石見東部沿岸における鉦と鍛冶屋の分布状況は、金屋子神社の『勸進帳』によれば、1791(寛政 3)年には恵口鉦・桜谷鉦・長良鉦・二川鉦・大矢鍛冶・温泉津鉦・宅野鉦・宅野小鍛冶・大浦鉦・静間村鉦・鳥井村鉦、1807(文化 4)年には恵口鉦・渡津鉦・桜谷鉦・土居鉦・長良鉦・上津井村鍛冶・二川鉦・宅野鉦・静間村鉦・百済鉦・大浦鉦、1819(文政 2)年には恵口鉦・桜谷鉦・下川戸鉦・長良鉦・宅野村鉦・大浦鉄山・静間村鉦・百済鉦の名が見える(森山 2004)。江の

川中流域の邑智郡では、寛政 3 年と文化 4 年の『勸進帳』に鉦と鍛冶屋がほぼ同数記載されているが、江の川下流域及び石見東部沿岸では鍛冶屋は宅野小鍛冶・上津井村鍛冶の 2ヶ所が見られるだけであり、大鍛冶場がほとんどなく鉦のみが立地していることが大きな特徴と言えよう。邑智郡川本町三上家文書のうち 1808(文化 5)年の「長良鉦定書」によれば、銑鉄のまま流通したと見られる「江津下銑」の他に、大鍛冶場がある邑智郡方面へ送られた「住郷河戸登銑」・「田津登銑」の記載も見られる(島根県 1965)。長良鉦では



図 4 石見東部沿岸に所在する鉦の分布

銑鉄生産しか行われておらず、鍊鉄にする場合には邑智郡方面へ送られたことが窺えるが、江の川下流域には大鍛冶場がないことから、こうした生産・流通体制がこの地域では共通のものであったと考えられよう。

鉦山内の状況は、浜田藩の御手鑑であった恵口鉦については1858(安政4)年に記された「御名目恵口鑑諸木屋道具小前帳」から垣間見ることができる(原1982)。これによれば、恵口鉦は本鑑・添鑑・勘場・門土蔵・小鉄洗場・本鑑右脇土蔵・元豊兵衛宅・同人上ミ炭木屋・本鑑前瓦ふき長屋・添鑑前小鉄洗場・添鑑上エ長屋・柿木元木屋と計12棟もの施設よりなり、本鑑と添鑑を併せもつ大規模な経営が行われていたと思われるが、大鍛冶場についての記載はやはり見られない。桜谷鉦は、1790(寛政2)年の「那賀郡太田村櫻谷鑑添村并土蔵木屋諸道具小前帳」では吹屋・勘場・土蔵・炭木屋2軒・村下屋・炭坂木屋・小鉄木屋・銑蔵・番子木屋2軒・山配屋がある。長田鉦は、1847(弘化4)年の「長田鉦懸り受けにつき諸小屋道具遣道具控」によれば勘場・吹屋・村下屋・炭坂屋・炭小屋2軒・小鉄洗場小屋などが書き上げられる(角田・中安2023)。奥谷鉦は、1874(明治7)年の「鉄鋳製鉦場願」に製鑑場・洗池・砂鉄洗所・勘定場・鉄蔵・炭小屋・下小屋とある(加地2008)。また、佃谷鉦は「明治三十年製造業課税標準届」によれば製造場・帳場兼砂鉄洗場・納屋・炭納屋が見え、俵国一が1898(明治31)年に調査した高殿・砂鉄洗場のほかに元小屋・炭納屋があったことが知られる(加地2005b)。

こうした例から見ると、江の川下流域における鉦は高殿・砂鉄洗場・砂鉄置き場・炭置き場・元小屋などからなる。大鍛冶場を伴わないのが一般的であり、鉦を構成する諸施設に鋳物用の銑鉄生産が中心であったことが反映されている。主製品であった銑鉄は、佃谷鉦の報告によれば「湯場」と称する径1m・深さ30～60cmの湯溜りに流し入れ、冷えた後に鋳で割取ったとある(俵1933)。

佃谷鉦の経営者であった渡利家に伝わる製鉄関連用具の中には玄翁・鎚・鑿・金箸があり、銑鉄を割取る際に使われたと見られる。一方、これらとともに保管されていた銑鉄塊は棒状を呈し、長さは片側の端部が欠損するが現状で19.0cm、幅は上面9.0cm・下面2.7cm、厚さ5.6～6.0cm、重さ4.6kgである。断面形が逆台形状で上面に気孔があることから、底面の幅が狭い溝状の型の中に溶融した銑鉄が流し込まれたもので、操業のある時期には定型化した湯溜りに銑鉄を直接流し取っていた可能性も考えられる。同様に銑鉄を流し取ったことが分かる資料としては、恵口鉦の銑鉄塊がある。長さは現状で65.0cm、幅は上面10.0cm・下面3.5cm、厚さ13.9～15.4cm、重さ47.2kgである。平面形は両端が窄まり、横断面形は底面が丸みを帯びた船底状を呈する。基部には本体に対し斜めに付いた湯口が見られる。湯口は上面幅5.0cm・下面幅1.8cm・厚さ6.6cmで、斜めに取り付くことは製鉄炉の小口に銑鉄流し取り用の型が複数(3本以上)設置されていたことを示しており、銑鉄の効率的な生産が窺われる(角田2008)。

鉦の操業期間は、江の川下流域及び石見東部沿岸では長期にわたるものが多い。桜谷鉦は金鑄児神社銘文と文献から1760(宝暦10)年から1892(明治25)年まで存続したことが確認でき、山祇社の銘文や『金屋子縁記抄』の記事から1734(享保19)年まで遡ることが考えられる。恵口鉦は1772(明和9)年に嘉久志村の高丸鉦が打替となったもので多くの史料が残るが、時期的に最も下るのは1890(明治23)年の金沢市武村家仕切・受取書の「恵口正銑151束」の記載である(長山2003)。また、長良鉦、二川鉦、宅野鉦、静間村鉦、鳥井村鉦は1791(寛政3)年の『勸進帳』に名が見え、1880～90年代まで操業が確認できる。この地域における鉦経営が安定したものでなかったことは、桜谷

地域	鉦名	1700	1720	1740	1760	1780	1800	1820	1840	1860	1880	1900	
安濃郡	鳥井 百済鉦 (鳥井村鉦)	1704~					~1791~1805~1819~		~1836~	~1860~1864~	~1877~1895		
		[Blue bar covering the entire row]											
濃尾郡	静間 静間村鉦 (和江鉦)	1704~			~1765~		~1791~1819~			~1858~1882~			
		[Blue bar covering the entire row]											
	破竹	古浦鉦 (大浦鉦)		~1730~31~	~1748~50~	~1763~71~	~1781~91~1819~		~1836~				
			[Blue bar covering the entire row]										
	宅野	逢水鉦 (宅野鉦)				1774~	~1780~84~1791~1836~			~1858~1862~	~1880~1894~		
			[Blue bar covering the entire row]										
	湯里	鉄ヶ谷鉦 (湯里鉦)					~1805~		~1836~1846~				
			[Blue bar covering the entire row]										
	温泉津	日宿鉦 (温泉津鉦)		~1740~41~			~1791~					~1880~1882~	
			[Blue bar covering the entire row]										
那賀郡	渡津	長田鉦 (渡津鉦)					~1790~	~1807~1836~		~1841~1871~			
			[Blue bar covering the entire row]										
	太田	桜谷鉦		1734~			~1781~1836~			~1858~1862~	~1880~1892~		
			[Blue bar covering the entire row]										
	下河戸	土屋鉦 (下河戸鉦)					~1807	~1819	~1836				
			[Blue bar covering the entire row]										
	長良	番ノ木鉦 (長良鉦)					~1791~1819~		~1836		~1864		
			[Blue bar covering the entire row]										
南川登	恵口鉦					1772~			1857	~1880~1890			
		[Blue bar covering the entire row]											
波積本郷	波積鉦 (二川鉦)					~1791~1807~	1817	~1836		~1880~1882~1899			
		[Blue bar covering the entire row]											
下河戸	備谷鉦										~1895~1918		

図5 石見沿岸部に所在する鉦の操業期間

鉦における経営者の変遷や、浜田藩の御手鑑であった恵口鉦でさえ苦しい経営状態にあったこと(原1982)から窺えるが、休止期があったにせよ多くの鉦が1世紀またはそれ以上存続したと見られる点は注意される。

これを出雲と比較すると、糸原家が経営した鉦では雨川鉦が1788(天明8)年から大正年間まで稼働するものの、その他の操業期間は5~18年くらいまで(鳥谷2005)、櫻井家では宇根鉦が1776(安永5)年から近代まで操業される他は3~10年程度(鳥谷2006)、田儀桜井家の場合は沿岸部に立地する越堂鉦が1745(延享2)年~1882(明治15)年まで稼働する他は2~37年である(鳥谷2004)。出雲では鉄山経営の中心となる鉦を除けば、100年を超えるような長期間操業の鉦は見られず、江の川下流域の鉦とは対照的である。

出雲山間部の鉦が大鉄山師の経営であったにもかかわらず操業期間が短かったのは、燃料の大炭となる鉦周辺の森林が伐採により枯渇し、燃料輸送のため移動を余儀なくされたからである(鳥谷2005)。江の川下流域と石見東部沿岸の鉦は、経営者がたびたび代わるような零細な経営ではあったが、原材料である木炭・砂鉄の輸送を水運で行っており、出雲山間部のような燃料輸送の問題はなかったことが長期間操業の理由として考えられよう。

(2) 桜谷鉦の金鑄児神社から見た江の川下流域の鉄生産

桜谷鉦の金鑄児神社は、金鑄児社を中心に船魂社・山祇社が整然と配置されており、祭神不明の祠は愛宕社である可能性が高い。金鑄児社は製鉄の守護神である金屋子神を祭る社であるが、その前に並ぶ船魂社は原料や製品を運ぶ船の守護神を祭る社、山祇社は原料の砂鉄や木炭に関わる山神を祭る社、愛宕社は鉦を火災から守る神を祭る社であり、金屋子神だけでなく原料の生産や原料・製品の輸送に係る神々が信仰対象となっていたことが分かる。出雲山間部でも鉦の山内では金

屋子神のみならず、山神、愛宕神・秋葉神、荷物を運ぶ牛馬を守る八重山神、人や牛馬の足を守る馬頭観音、水を司る大山地蔵、かまどを守る荒神など鉄生産に関わるあらゆる神が祭られており（三宅 2004、河瀬・山崎 2007）、桜谷鉦の金鑄児神社もそうした山内における信仰を示すものと言える。

桜谷鉦金鑄児神社の特色は、祭神である金屋子神に「金鑄児大明神」の文字が当てられることである。採鉱冶金神に金を鑄るという意味から金鑄または金井という名を付けるのは東日本に多く、鍛冶・鑄物師・鉦師の別称であった金屋に子をつけて金屋子とする地域は兵庫県北部から島根県のたたら製鉄が盛行した地域に限られるとされる（石塚 2004）。「金鑄児」は金を鑄る金鑄に、この地域の冶金神に特徴的な児(子)をつけて金屋子神を表しており、江の川下流域において行われた鑄物用銑鉄の生産を反映したものと考えられる。主として鑄物用銑鉄を生産する体制は1791(寛政3)年の『勸進帳』に記載された鉦・鍛冶屋の分布状況より18世紀末には成立していたと思われるが、金鑄児社が1761(宝暦11)年に勧請されていることからすればこうした体制が18世紀中頃まで遡る可能性もあろう。

金鑄児神社のもう一つの特色は、船の守護神である船魂神が信仰されたことである。桜谷鉦に関わる記録には、原料の砂鉄を日本海沿岸の塩田嘉地屋家のほか渡津村大濱・郷田村大濱・嘉久志村から買い入れたことや、主製品の銑鉄が大阪や北陸に販売されたことを示すものがあることは既に述べたが、こうした原材料や製品の輸送には江の川の水運が利用され、江津など廻船の寄港地から各地へ運ばれた。銑鉄は単価が安く、1878(明治11)年には鍊鉄・鋼に比べ半分の程度の単価で取引されたことが分かっており、言い換えれば大量輸送が可能で相対的に安価な海上輸送が江の川下流域の鉦経営を支えたと見ることもできる。船魂神が祭られたのは、製品の輸送に欠かせなかった船の安全を祈願するためであり、輸送に牛馬が使われた出雲市佐田町加賀谷鉦の山内では牛馬を守る八重山神社や馬頭観音が祭られたことと（河瀬・山崎 2007）、同様な意味をもつと考えられる。

江の川下流域における鉄生産は、原材料となる砂鉄や木炭の搬入や、製品である銑鉄の搬出に水運を利用し、鑄物用銑鉄が生産されたところに大きな特色がある。桜谷鉦の金鑄児神社は、この地域におけるこうした鉄生産の特色を端的に示したものと言うことができよう。

おわりに

桜谷鉦は、もっぱら鑄物用の銑鉄を生産したこと、木炭・砂鉄の搬入や製品である銑鉄の輸送に水運を利用したことなど、江の川下流域におけるたたら製鉄の様相をよく示す。経営者には石田春律も見え、『金屋子縁記抄』の執筆にあたっては桜谷鉦の操業が参考にされたとみられる。桜谷鉦は、まさに当地域のたたら製鉄を象徴するものといえるであろう。

発掘調査によって明らかとなった製鉄遺構が桜谷鉦であるかどうかはさておき、石田春律の『金屋子縁記抄』に記載される鉦であることは確かであり、その実態が明らかになったことは大きな成果であった。しかしながら、防災事業のため記録保存の措置をとらざるを得なかったことは残念である。現地には、桜谷鉦金鑄児神社が唯一現存する施設として残る。祠には石田春律の名が記されるなど、江の川下流域におけるたたら製鉄の記念碑的な存在であり、保護・活用策が講じられることが望まれる。

参考文献

- 石田春律 1825 『金屋子縁記抄』 (石田彰複製 1994)
- 石塚尊俊 2004 「金屋子神の信仰とたたら」 鉄の道文化圏推進協議会編『金屋子信仰の基礎的研究』 岩田書院
- 角田徳幸 2008 「江津市桜谷鉦の金鑄児神社と江の川下流域の鉄生産」 『たたら研究』 第 48 号 たたら研究会
- 角田徳幸 2018 「江津市桜谷鉦の阿弥陀如来立像」 『たたら研究』 第 57 号 たたら研究会
- 角田徳幸 2024 「江津市中村家所蔵の製鉄用具」 『島根考古学会誌』 第 41 集 島根考古学会
- 角田徳幸・中安恵一 2023 「江津市長田鉦の関連史料」 『古代文化研究』 第 31 号 島根県古代文化センター
- 加地 至 2004 「明治期島根県石見地方における在来製鉄業の地域的特質」 『地域地理研究』 第 9 卷 地域地理科学会
- 加地 至 2005a 「石見沿海東部の在来製鉄業と備谷鉦」 『備谷鉦跡発掘調査報告書』 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
- 加地 至 2005b 「明治期在来製鉄業の諸類型と備谷鉦」 日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム編『中国地方のたたら製鉄の成立と発展』 (社) 日本鉄鋼協会
- 加地 至 2008 「中村家文書からみた奥谷鉦」 『桜江古文書を現代に活かす会報告書』 桜江古文書を現代に活かす会
- 河瀬正利・山崎順子 2007 「出雲市佐田町の加賀谷たたらとたたら祭礼道具」 『たたら研究』 第 46 号 たたら研究会
- 川本町歴史研究会 1994 『川本町文化財シリーズⅢ ふるさとの古文書(近世編)』
- 江津市 1982 『江津市誌』 別巻
- 相良英輔 2005 「鉄の道」 『出雲と石見銀山街道』 吉川弘文館
- 島根県 1882 『明治十三年島根県統計表』
- 島根県 1884 『明治十五年島根県統計表』
- 島根県 1887 『明治十七年島根県統計書』
- 島根県 1902 『明治三十二年島根県統計書』
- 島根県 1965 『新修島根県史』 史料編 3 近世下
- 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 2005 『備谷鉦跡発掘調査報告書』
- 依 国一 1933 『古来の砂鉄製錬法』 丸善
- 鳥谷智文 2004 「田儀桜井家の沿革」 『田儀桜井家』 多伎町教育委員会
- 鳥谷智文 2005 「奥出雲絲原家の歴史的変遷について」 『鉄師絲原家の研究と文書目録』 横田町教育委員会
- 鳥谷智文 2006 「近世後期から明治前期における櫻井家鉄山経営」 『櫻井家たたらの研究と文書目録』 奥出雲町教育委員会
- 長山直治 2003 「金沢鋳物師武村家の経営と水運について」 『市史かなざわ』 第 9 号 金沢市
- 原 龍雄 1982 「たたらへの盛行と農漁村」 『江津市誌』 上巻 江津市
- 原田洋一郎 2017 「十八世紀の石見銀山領港町における銑・鉄取引」 『石見銀山の社会と経済』 島根県教育委員会
- 松田忠幸 2003 「桜谷鉦跡」 『石見潟』 第 22 号 江津市文化財研究会
- 三宅博士 2004 「金屋子神の神像と供献物」 鉄の道文化圏推進協議会編『金屋子信仰の基礎的研究』 岩田書院
- 森山一止 2003 「史料から見た「ヒナシ」について」 『たたら研究』 第 43 号 たたら研究会
- 森山一止 2004 「金屋子神社所蔵 勸進帳」 鉄の道文化圏推進協議会編『金屋子信仰の基礎的研究』 岩田書院
- 森脇太一 1966 「石見江津地方における小鉄事業」 『たたら研究』 第 13 号 たたら研究会
- 渡辺一雄 2003 「萩藩領における石見系鉦」 日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム編『山陰における鉄・鉄器生産の諸問題』 (社) 日本鉄鋼協会

表1 金鑄児神社銘文と文書から見た桜谷鉦

西暦	年号	表題・記事	出典
1714	正徳4	那賀郡大田鉦	中村家文書
1734	享保19	鑪天秤元祖之事 金屋子鑪 渡利屋重良兵衛	『金屋子縁起抄』
1741	元文6	大田鉦行恒市右衛門	宅野泉屋文書
1760	宝暦10	相渡し申一札之事	中村家文書
1761	宝暦11	金鑄児社 渡利一蔵正朗・十平治正常	銘文
1762	宝暦12	売申山立壺はゑ之事	中村家文書
1763	宝暦13	山祇社再建 渡利一蔵正朗・十平治正常	銘文
1763	宝暦13	船魂社 渡利一蔵正朗・十平治正常	銘文
1771	明和8	幸福皆来帳 銃3,374束 浜原西田屋の経営	中村家文書
1790	寛政2	那賀郡太田村桜谷鑪添村并土蔵木屋諸道具小前帳	中村家文書
1790	寛政2	太田村桜谷鉦株川本村十平次殿・波積友右衛門殿江賣渡證文并諸道具下積帳加印扣	中村家文書
1791	寛政3	村下 吉右衛門 炭坂 和三郎	『勸進帳』
1805	文化2	鉦師 重三郎	三上家文書
1807	文化4	村下 富右衛門 炭坂 藤十郎	『勸進帳』
1809	文化6	権左衛門代 利八	三上家文書
1816	文化13	金鑄児社 石田初右衛門春律・権左衛門春胤	銘文
1817	文化14	古へ桜谷鉦の頭、今地蔵岩と申所御出	『石見八重葎』
1819	文政2	鉦師 利右衛門	『勸進帳』
1825	文政8	石見国太田村金屋子鑪打附之事	『金屋子縁起抄』
1832	天保3	長田鑪桜谷鑪長良鑪大炭引合帳	中村家文書
1833	天保4	太田波積屋桜谷鉦所諸類入改	中村家文書
1833	天保4	當巳より来る亥迄七ヶ年季相渡し申鑪鐵砂場畑山林質地證文之事	京都大学
1836	天保7	太田村の内字桜谷鑪	沢津家文書
1836	天保7	稼人 岩谷耕助 下稼人 多右衛門	鶴田真秀採録
1837	天保8	銃定高 1,800駄	中原家文書
1858	安政5	村下 辰口	銘文
1862	文久2	小鉄代金 十月二十五日金三両一分ほか	塩田嘉地屋家文書
1880	明治13	生産高 16,350貫	『島根県統計書』
1881	明治14	生産高 17,380貫	『島根県統計書』
1882	明治15	生産高 25,450貫	『島根県統計書』
1883	明治16	生産高 4,530貫	『島根県統計書』
1884	明治17	生産高 18,230貫	『島根県統計書』
1884	明治17	島根県下製鍊場巡回復命書	海軍省
1888	明治21	桜谷銃210束	武村家文書
1892	明治25	桜谷銃450束	武村家文書

表2 明治時代初期の鉄・砂鉄生産状況

村名	銑	鋤	小長割鉄	砂鉄	備考
渡津村	7,760貫				質美、越前又ハ摂津地方へ輸送ス
太田村	15,000貫				銑質美ナリ、阪地へ輸送ス
八神村			2,500貫		其ノ質悪シ、阪地へ輸送ス
下河戸村	12,000貫				銑質美ナリ、阪地へ輸送ス
長良村	29,940貫				銑質美ナリ、明治9年
波積本郷村	17,100貫	460貫			那賀郡黒松村へ輸送ス
平田村	900駄				郷田村へ輸出ス
南川上村	38,950貫				銑質美ナリ、明治9年
郷田村				50,000貫	砂鉄質中等、郷川沿流各地へ輸送ス
金田村				20,000貫	砂鉄質佳、郷川沿流各地へ輸送ス
和木村				9,400貫	砂鉄質中等
嘉久志村				50,000貫	砂鉄質中等、郷川沿流各地へ輸送ス
千田村				11,500貫	其ノ質佳、南川上村ニ輸送ス
神村				9,980貫	砂鉄其質美

